



パレルモ紀行 2

ノルマン王宮へも足を運ぶ。ここは、かつての王たちの住まいであり、現在はシチリア州議会が置かれている。その2階にあるパラティーノ礼拝堂は息を呑む美しさである。豪華なモザイク画が天井を飾り、聖なる空間を作り出している。信仰と芸術の融合。そして、アラブとノルマンの技術が融合したその美しさは、私に深い感動を与えた。金色を主体としつつも所々に青色を確認することもできる。それはラヴェンナのマザイクを思い出させる。どちらもマザイクに興味がある人には必見だ。私はしばしその場に佇む。信仰の対象としてだけでなく、訪れる人々に安らぎを与える場所でもある。



さらにロザリオ イン サンタ チータ祈禱堂 (Oratorio di Santa Cita) へ。建物の入り口は地味である。だが、イタリアではよくあることだが、外観だけで判断すると後で裏切られることになる。もちろん、良い意味で。建物の2階の受け付けで係りの人からチケットを購入し、早速、祈禱堂の内部へ。祈禱堂は

シンプルな長方形のホールであるが、その側壁はシチリアの著名なスタッコ彫刻家であるジャコモ・セルポッタの巧みな手によって装飾されている。まさに圧巻の一言。そこにはキリストの生涯を描いた彫刻がぎっしりと並び、有名なレパントの海戦も描かれている。塩野七生さんの著書「レパントの海戦」を読まれた方は是非この祈禱堂へ。ついでながら、彼女の本をきっかけに古代ローマにのめり込んだ人も多いと思うが、私もその一人である。お仲間の方は是非ご連絡を。

話を戻し、ロザリオ イン サンタ チータ祈禱堂の最も素晴らしい点の一つについて。それは、ここを訪れる人が少ないことである。私はこの小さな部屋に一時間ほど滞在したが、その間に訪れた人は数人であった。ほとんどの時間で誰にも邪魔されずにこの空間を堪能することができた。



夕暮れが迫ると、パレルモの街はまた違った表情を見せる。太陽が西に沈むにつれ、街の灯りがともり、雰囲気が一変する。歴史的な建物の石壁はオレンジ色の街灯に照らされ、古い教会はどこか神秘的である。空も負けじとオレンジ色に染まり、海がそれを反射

する。少し切ない感情が湧いてくる。

さて、夜である。パレルモの夜を楽しむには、まず街を歩いてみる事が大切だ。中心部の「プレトリア広場」や「カヴール広場」には、地元の人々や観光客が集まり、賑やかな雰囲気が漂う。周囲の歴史的な建物がライトアップされ、昼間とは異なる美しさを見せる。特に、パレルモ大聖堂の夜景は必見で、荘厳な姿が幻想的に輝く。

夜のパレルモでは、ナイトマーケットも楽しみの一つ。特に「バッラロ市場」や「カーポ市場」では、夜遅くまで営業している店があり、地元の食材や特産品が並ぶ。新鮮な魚介類や串焼き、オリーブオイルなどを見ながら、地元の人々と交流するのも楽しい。市場の活気に触れ、シチリアの食文化を感じることができる。海の幸が美味しいのはもちろんのことであるが、個人的なおすすめは（苦手であれば）脾臓バーガー。意外とあっさりとしている。是非ビールと一緒に。

街には多くのレストランやバーが点在しており、地元の料理を味わうことができる。シチリアの名物料理である「アランチーニ」や「カポナータ」、新鮮なシーフードを使った料理は、ぜひ試してみたい。ワインも地元産が豊富で、食事と共に楽しむと良い。

パレルモの魅力は、歴史だけではない。街を歩いていると、地元の人々の日常が目に飛び込んでくる。市場の喧騒、地元の人々の笑顔、食文化の豊かさ、そしてノーヘルでの二人乗りバイク。それらのすべてがこの街を特



別にする。

パレルモの旅は、あっという間に過ぎ去った。歴史的な遺産、豊かな食文化、そして地元の人々との交流。これらの経験は、私の心に深く刻まれた。パレルモの歴史は、決して平坦ではなかった。様々な民族がこの地を支配し、文化を融合させてきた。アラブの影響を受けた庭園や、ノルマンの城、バロック様式の教会が共存するこの街は、まさに「文化の十字路」と呼ぶにふさわしい。訪れる者は、ただ観光するのではなく、その歴史に触れ、感じることができる。次に訪れるときは、さらに深い理解を持ってこの街を歩きたいと心から思う。

パレルモ紀行1は2025年6月号に掲載

著者紹介



宮垣 文晴
(みやがき たけはる)

日本弁理士、欧州特許弁理士。
2015年に新樹グローバル・アイピーに入所。2016年よりボローニャ在住。
2004年に知財分野のキャリアをスタート。機械、電気電子、ソフトウェア分野の特許出願及び中間処理、クリアランス調査、無効資料調査、鑑定等を担当。

立命館大学大学院修了。専門はロボット工学。

unitedgips.com

